

7

# News Letter

巻頭言  
2021年度大会  
夏の学校  
シンポジウム  
優秀発表賞  
臨時総会  
大会総括  
ISAE2021  
動物福祉  
イブニングセミナー

2021. Nov

動物の行動と管理学会

# 7 News Letter

2021. Nov

動物の行動と管理学会

## 巻頭言 副会長挨拶

竹田 謙一 (信州大学)

今期、副会長を仰せつかりました信州大学農学部竹田謙一です。これまで、学会の役員歴はありましたが、副会長と言う重責に肩が凝り始めています。会長に何かあった時のサポート役程度のイメージでいたのですが、青山会長の下、副会長には担当職務が命ぜられました。私と同じ副会長の加隈先生とともに、オンラインマテリアルの構築を検討することになったのです。まだまだ議論は緒に就いたばかりですが、



会員の皆様のお役に立てるよう、また、非会員の方でも本学会の活動内容や取り組みの一端を垣間見られるようなオンライン教材を構築したいと思っています。2年間という任期で、時間に余裕はありませんが、精一杯努めてまいります。何卒、よろしくお願いいたします。

さて、コロナ禍の中、会員の皆様は様々な制約の中で、研究や授業、それぞれの活動に取り組まれていることかと思えます。このコロナ禍で、昨年1年間は学会活動のみならず、普段の生活すら先が見えないこともありました。しかし今や、リモート会議は当たり前、それを支える関連商品は店頭にあふれ、私たちの様々な活動に新しい手段が産まれました。大学での講義も、最初の頃は接続が上手くいかない、画面共有ができない、セキュリティは大丈夫なのか等、トラブルや懸念があったものの、見様見真似で、利用されていたと思います。それから1年が経ち、携帯電話のように、新しい手段に躊躇することなく、多くの人たちが使うようになりました。お陰様で、本学会が衣替えして初めての大会が、先月、無事に開催され、盛會に終えることができました。リモート形式での大会開催にあたり、慣れない作業をテキパキとこなし、準備から当日の進行まで、大会の運営を担って頂きました新村毅先生、加瀬ちひろ先生、田辺智樹先生、リングホーファー萌奈美先生には、心より感謝申し上げます(私の頭の中での妄想では、この拙文を読まれた会員が拍手している姿が見えます!)。直接、皆さまとお会いすることができるのが一番ですが、リモート形式もなかなかですね。単に発表だけではなく、活発な質疑応答があったことも特筆すべきで、「ああ、大会があって良かったなあ」というのが参加された皆さまの共通の想いではないでしょうか。

来年こそは、対面形式での大会でありたいと思います。リモート形式、対面形式問わず、限られた時間内での発表、質疑応答は、議論の深まらないこともままあります。対面形式での良い所、そして、本学会の特徴でもあるのですが、発表後の休憩時間や、皆さんが一番楽しめる懇親会の場で、「さっきの発表なんだけど・・・」、「あの分析って、こういう風に捉えればいいんじゃないの?」等々、多くの示唆に富んだアドバイスが得られます。見る人が変われば、物事の捉え方も三者三様で、様々なアドバイスを頂くことで、自身の視野も多角的になります。

本学会の研究主軸でもありますが、動物行動学や動物生理学を基盤にして、置かれた環境下での動物の状態、飼育システムの評価や新たな提案、動物と人とが関わる場面での課題解決は、まさに多角的に捉えることによって、理解や技術革新が進む分野です。この原稿を書いた今日、私は大学の職務で、教員免許取得を目指す学生さんと一緒に、地域の教育研究協議会が主催する小中学校の公開授業に参加してきました。小中学校では、平成29年に学習指導要領が改訂され、すべての科目で、多角的・多面的、複合的な視点で事象をとらえ問題を見出すことができる力を養えるよう、授業が組まれているのだそうです。大人である私たちが狭い視野で物事を捉えてはダメですね。様々な、あるいは異なる分野での捉え方を組み合わせることによって、新たな発想が生まれ、ご自身の思考も深化していくことでしょう。

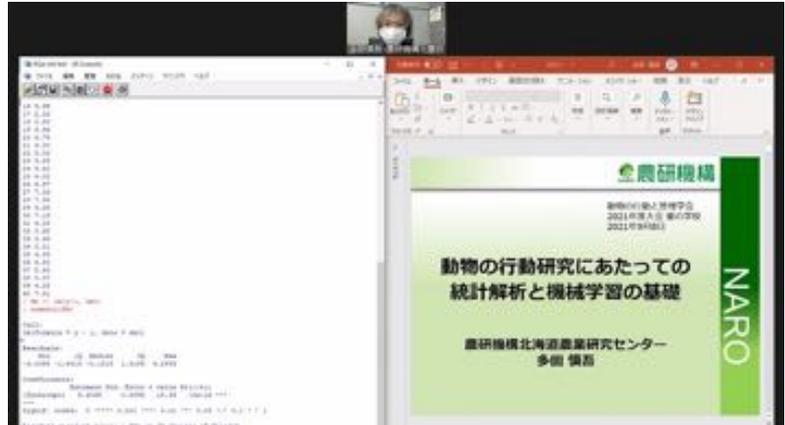
さて、来年はどこの場所で大会が開催されるでしょうか?(執行部では、まだ議論をしておりませんが、ぜひ、大会にご参加ください。会員の皆さまと直接お会いし、大いに議論できることを来しております。

## 2021年度大会 夏の学校 技術レクチャー 報告

### 「動物の行動研究にあたっての統計解析と機械学習の基礎」

多田 慎吾（農研機構北海道農業研究センター）

本学会大会の若手向け企画、夏の学校のお時間をいただき、データ解析に関する技術レクチャー講演をさせていただきました。かたちとしては私が講義しながら30名弱の参加者の皆さんと一緒に各自のPCを使って実際に解析をやってみる演習形式をとりました。大会全体がオンライン形式でしたので手元には常にPCがあるということで、こういったやり方もとりやすかったと思います。参加者の皆さんには、用いる解析ソフト「R」のインストールと簡単な予習問題を事前に済ませた上で、当日に臨んでもらいました。ねらいや内容の概要は以下の通りです（参加者へ事前配布の資料に記載のもの）。



-----↓↓↓ここから↓↓↓-----

#### 【概要】

研究に取り組み始めた学生や若手にとって、取得データの統計解析はつまずきがちなポイントである。さらに動物の行動研究においては、行動回数や行動割合のように正規分布を前提とした統計手法がふさわしくないデータを取り扱う、また、個体差等の要因によりデータのばらつきが大きくなる、といったケースも多く、これらが一層適切なデータ解析を難しくしている。本技術レクチャーでは、動物の行動と管理に関する研究に携わる若手研究者を対象とし、解析ソフト「R」を使用しながら演習形式で動物の行動データ例を実際に解析し、基本的なデータ解析手法と考え方を身に付けることを目的とする。具体的にはオンラインの講義形式にて、事前に配布する例データと計算コードを用い、参加者各自が自身のPCで解析を実践するかたちで取り進める。講師は、参加者に分からない点、疑問点があった際にその都度口頭もしくはリモートでのPC操作で対応する。

#### ●紹介予定の内容

- ・一般線形モデルとは（分散分析、共分散分析、回帰分析、重回帰分析は全てこれ）
- ・有意差検定とは（作ったモデルでデータ取得のシミュレーション → 偶然？ そうじゃない？）
- ・一般化線形モデル（一般線形モデルを拡張して回数データや割合データを解析）
- ・一般化線形混合モデル（一般化線形モデルをさらに拡張して個体差を扱う）
- ・簡単な機械学習手法の紹介（非線形のデータも解析できる）

-----↑↑↑ここまで↑↑↑-----

このような大層な内容を掲げましたが、私は統計学の専門家ではなく自分で経験がある方法しか紹介できませんし、こういったかたちのオンライン講義をするのも初めてでしたので、不安でいっぱいでした。ですが、参加いただけた皆さんには今回のレクチャー内容を自習の材料にできる程度のソフトの動かし方くらいは伝えられたかと思えます。皆さんの面白い動物行動研究を進める上での一助になれば幸いですし、もっと勉強してくれて私にデータ解析のことを教えていただければ何よりです。

最後に、参加者の皆様、喋り下手かつ一方通行な説明になりがちだったかもしれず申し訳ございませんでしたが、長い時間お付き合いいただきありがとうございました。レクチャーの後に個別にメッセージをくださった方もおられて、オンライン形式でリアクションが把握しづらく不安だった気持ちが救われ、とても嬉しかったです。また、新村大会理事には、この企画を推していただき、おかげでこういった機会をいただけました（とても大変でしたが）。田辺大会理事には、私が期日ギリギリまで準備しないのに、準備の段階から当日まで丁寧に段取り、サポートしていただきました。心から感謝申し上げます。

最後の最後に宣伝ですが、本レクチャーの一部は本学会の学会誌53巻の解説記事（多田・新村, 2017）の内容とも重なりますので、ご興味ある方はご参照ください。

## 2021年度大会 シンポジウム開催報告

新村 毅(大会担当・東京農工大学)

2021年9月9日(木)の午前中、Zoomを用いたウェビナー形式で、シンポジウム「アニマルウェルフェアとは何か?」を、開催しました。このシンポジウムは、公開シンポジウムとして開催され、参加登録者は合計で213名(うち一般参加者が42.7%)となり、このテーマに関する興味が高揚していることが伺えました。シンポジウムでは、概論を矢用健一先生(農研機構)に、続く各論では、産業動物を竹田謙一先生(信州大学)、伴侶動物を加隈良枝先生(帝京科学大学)、動物園動物を伊藤秀一先生(東海大学)、野生動物を平田滋樹先生(農研機構)のそれぞれの福祉や問題点について講演頂きました。それを受けてのパネルディスカッションでは、改めて「動物福祉=動物の状態」という定義づけ、また、それを捉える上では5つの自由(Five freedoms)という観点から捉えて行くということは、いずれの動物カテゴリーでも共通項であることを議論しました。その先の各論では、「バランス」というキーワードを基に、各動物カテゴリーにおける動物福祉を推進する上での難しさや問題点、さらにそれらの解決策などを、事前に受け付けた質問を基に議論しました。動物福祉は、日本ではまだまだ発展途上ではあるものの、明らかに過渡期に突入した感があり、当学会の果たすべき役割は益々大きくなっていると感じました。今回のシンポジウムは、下記URLからも視聴できますので、ぜひ御確認頂ければと思います。

[https://drive.google.com/file/d/1TxFu5IXJCVxvNZbKYGBR\\_fnU15mpEPL/view?usp=sharing](https://drive.google.com/file/d/1TxFu5IXJCVxvNZbKYGBR_fnU15mpEPL/view?usp=sharing)



## シンポジウム参加報告

石田 郁貴(千葉市動物公園)

2021年9月9日、10日に開催された動物の行動と管理学会の公開シンポジウムに参加したのでご報告いたします。

学会はオンラインで開催され、直接のディスカッションが恋しくある一方、終了後そのまま保育園にお迎えに行くことができるオンライン大会ならではの良さも感じました。

公開シンポジウムは、矢用先生による動物福祉(アニマルウェルフェア)と動物愛護の違い、アニマルウェルフェアとコストのバランスなど概論から始まり、産業動物、伴侶動物、動物園動物、野生動物においてそれぞれ第一線で研究を行っている先生方によって、「アニマルウェルフェアとは何か?」のテーマの元講演が行われました。

竹田先生からは産業動物分野についてWeb上のチェックリストや投資家向けにレポートされているHPなど誰でもが閲覧できる情報を多数交えてお話いただきました。次の加隈先生(伴侶動物分野)のお話ではペットショップ等の動物取扱業に対し、数値を定めての罰則規定が施行されたことを非常に画期的に感じました。私が籍を置く動物園の分野は、伊藤先生が取り上げられたようにそもそも動物園を定義する法律が存在せず、それによって宙ぶらりんになっている問題も少なくありません。更に、管理者側にアニマルウェルフェアについての理解が少ないことに起因する弊害など、身につまされるトピックばかりでした。平田先生による野生動物分野のお話では、効率や肉質を考慮した捕獲や屠殺方法が図らずもアニマルウェルフェアも同時に担保した手法であったことなど、動物園において屠体給餌が広まりつつある中で学ぶべきことが多くあると感じました。

基本的な状況から法整備や規制などの最新情報までが取り上げられ、Covid-19が猛威を振るい、交流のほとんどが制限されて新しい情報を手にするのが難しい昨今において、各分野の情報を一気にアップデートできる贅沢な時間でした。ご講演いただいた先生方、そして大会の運営に携わられた皆様に心より感謝申し上げます。



## 2021年度大会 優秀発表賞報告

### 田辺 智樹(大会担当・道総研酪農試)

優秀発表表彰は口頭発表の学生会員を対象とし、今年度の大会では20題のエントリーがありました。昨年度開催できなかったことやオンライン開催ということもあり、例年よりもエントリー数が多く、若手研究者の発表が多い活気のある大会となりました。

オンライン学会での発表が初めての学生さん、学会発表が初めての学生さんなど不安を抱えていた学生も多かったと思いますが、どの演題もスライドや説明に工夫がなされていてとてもわかりやすい発表でした。そのため、優秀発表者を選出するには苦労しました…。次大会はどういった開催方法になるか未定ですが、今大会のように多くの若手研究者に発表してもらえることを期待しています。最後に、お忙しいなか審査員を引き受けていただいた先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



厳正なる審査の結果、以下4名の方を今大会の優秀発表者として決定いたしました。

安田 広大さん(東京農工大院農)  
「ロボット工学を用いたブロイラー雛の行動制御」

星野 智さん(岐阜大院連農)  
「樹葉サイレージの発酵特性と動物園動物に対する嗜好性」

松田 朋丸さん(東京農工大院連合農)  
「動物園におけるサシバエ吸血血液のDNA分析による飛翔範囲の推定」

山本 誉さん(大阪大院人間科学)  
「飼育ホッキョクグマにおけるささ鳴きの発達変化」

## 優秀発表賞 受賞コメント

### 安田 広大(東京農工大院農)

初めに、コロナ禍の難しい状況の中で準備、実施していただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。また、優秀発表賞という素晴らしい賞をいただき非常に光栄です。審査員の方々および指導して下さった新村毅教授に深くお礼申し上げます。

今回が私にとって初めての学会発表だったので、自分の研究内容を全く知らない方々に対して、短い時間で伝えることが難しく感じました。特に、多くのデータの中で何を選び、どのように見せるかという点で試行錯誤しました。我が子のように愛着のあった実験データを切り捨てることは辛いことでした。しかし大変であった分やりがいがあり楽しく、考察の洗練やプレゼンテーションの練習にも繋がったので、貴重な経験をさせていただきました。これまで同期がマイクロな実験を行っている中、私は非常にマクロで泥臭い実験ばかりで不安になる夜もありましたが、今回このような賞をいただけたことで大きな自信になりました。一方で、受賞の大きな要因が研究内容の新奇性や面白さであると考えているので、ただ面白いだけの研究にならないように引き続き精進していこうと思います。



## 星野 智(岐阜大院連農)



この度は、2021年度研究発表会での口頭発表において、優秀発表賞をいただきましたこと、大変嬉しく思います。この研究の遂行に携わっていただいた日本平動物園の飼育担当者の皆さまと、自由に研究テーマを提案し進めることを許容してくれた八代田真人教授に、深くお礼申し上げます。

思い返せば、今回発表した研究テーマを起案したのは、コロナウィルス感染拡大が国内で本格化し始めた2020年3月です。まさか1年半経った今でも感染拡大が収まることはなく、研究の成果をオンラインで発表することなど、当時の私は想像していませんでした。加えて、学会という場での口頭発表は、私にとって初の試みでした。発表や質疑応答では必要以上に喋ってしまい大変反省しておりましたが、このような賞をいただき少しだけ安堵しています。今回の結果に満足することなく、動物園動物の飼養管理方法の改善を目指して、様々な角度から今後もチャレンジしていきたいと考えています。

末筆ではございますが、コロナ感染の終息と皆さまの益々のご発展をお祈りしつつ、感謝の言葉とさせていただきます。

## 松田 朋丸(東京農工大院連合農)

皆様、初めまして。この度、2021年度研究発表会優秀賞をいただきました、東京農工大学大学院の松田です。

口頭発表は今回が初めてであったため、緊張から発表内容に拙い部分もあったものの、とても楽しく発表することができました。新型コロナウイルスの影響で、なかなか研究がうまく進まず行き詰っている状況でしたが、今回の発表を通して、自分の研究の重要性を再確認する良い機会となりました。

これからも動物園におけるサシバエ研究に励んでいきますので、皆様からのご教授を頂けると幸いです。ありがとうございました。



## 山本 誉(大阪大院人間科学)



このたび優秀発表賞をいただきました、大阪大学の山本誉です。今回開催された「動物の行動と管理学会2021年度大会」が、人生初の学会参加&発表でした。二度とない舞台上で名誉ある賞をいただくことができ、本当に光栄です。ありがとうございました。

幼いころの夢が“どうぶつはかせ”で、いつからか動物園で研究がしたいと思うようになりました。学部は北海道大学の文学部に所属し、河合正人先生・猪瀬(瀧本)彩加先生のご指導の下、子ウマの社会関係についての卒業論文を執筆しました。現在は大阪大学で、中道正之先生・山田一憲先生のご指導の下、飼育ホッキョクグマの行動発達研究に励んでいます。

大学院生活が始まると同時にコロナ禍に見舞われましたが、そんな中、のちの研究対象となるホッキョクグマのハウちゃんが天王寺動物園で誕生しました。観覧に行列ができるほど大人気の動物を対象に研究していること、そして、“どうぶつはかせ”に少しずつ近づいていることを実感しながら毎日を過ごしています。

最後に私事の宣伝で恐縮ですが、対象としているホッキョクグマ母子を撮影した写真集が、天王寺動物園との共同研究の一環として11月25日(木)に発売されることとなりました。もしご興味がありましたらご覧ください！

## 2021年度大会 参加報告

壇 真依子 (北里大学大学院)

2021年9月9日、10日にオンライン上で開催されました2021年度研究発表会に参加しましたので、報告いたします。

私自身、今年動物の行動と管理学会に入会し、今回の学会大会は私にとって人生初めての学会参加であり、初めての発表で多くの刺激を受けることができました。皆さんにとっても今回の学会は統合して初めての大会、さらにオンラインでの開催ということで、これまでの学会とは違った刺激を受けることができたのではないかと思います。

私は「汎用型タブレット端末3Dスキャナーを用いたウマの体格測定」というテーマで発表をいたしました。これは、iPadに搭載された3Dスキャナーでウマ全体を撮影し、立体構築された3D画像から馬体測定をするという新たな体格測定方法にかんする研究発表でした。これまで学内の発表しか経験が無く、同じ分野を専門にする方々の前で発表するのは初めてだったため、どのような視点で聞いてくださるのか、どんな質問が来るのか、全く予想がつかず大変緊張しましたが、なんとか無事発表出来ました。ありがとうございました。

また、他大学の学生の方や先生方の研究発表を初めて聞き、自分の大学や研究室での研究とは違う視点や手法を多く学ぶことが出来ました。自分には馴染みのなかった幅広い動物や分野からの研究について知ることができたことで、さらに広い視点で自分の研究を考えるきっかけになりました。大会期間終了後も他大学の方と情報交換し、今大会をきっかけとしてより有意義なネットワークが構築できたと実感しております。

来年も参加させていただくつもりでおりますので、私自身も今回学んだことを生かしてさらに成長したいと思っております。そして、来年はコロナも落ち着き実際に皆さんとお会いして情報交換できることを期待しております。



## 2021年度 臨時総会報告

八代田 真人 (総務担当・岐阜大学)

2年ぶりの研究発表会開催に合わせて、2021年9月に臨時総会を開催しました。前身学会では研究発表会の開催時期を基本的に3月としておりましたが、動物の行動と管理学会の設立に伴い、開催時期を柔軟にすることとしました。これは、会員の研究発表会参加をさらに促進するための措置ですが、一方で、会則第16条「総会は…(中略)…毎年1回、会計年度終了後3カ月以内に開催し、本会の運営上の重要事項について審議する」に抵触する可能性があります。そこで、今回の臨時総会では、この条文の改正を審議し、承認頂きました。あわせて、2年ぶりの研究発表会のために、優秀発表章選考委員の選出についても、急遽ご審議頂きました。久しぶりの研究発表会であったためか、エントリー数も多く、選考委員も異例の12名の会員にお願いすることになりましたが、つつがなくお認め頂きました。

会則や規則は、学会運営になくはならないものですが、状況に応じて見直しが必要なこともあります。ただし、これらの変更には会員の皆様のご意見やご了承が必要であり、「総会」はそのための重要な議決の場です。「総会なんか出なくてもいいでしょ」という気持ちは、私もよく理解しますが、不成立になったりすると学会運営もままならなくなるので、どうか皆様、今後ともご参加くださいますよう。

最後になりましたが、オンライン総会という慣れない方式をご準備くださった大会担当理事の皆様と参加くださった会員の皆様にお礼申し上げます。



## 2021年度大会 大会を終えて

加瀬 ちひろ(大会担当・麻布大学)

幻に終わってしまった2020年大会は、動物の行動と管理学会になって初めての学術集会だった事もあり、当時大会担当理事の1人だった私は特別な気持ちで企画を進めていました。残念ながら開催は叶いませんでしたがその悔しい気持ちをバネに、2021年こそは何としてでも開催すべく、新村さん、田辺さん、リングホーファーさんと共に大会の企画運営に燃えました。オンライン開催にすることで、今までにはなかった準備や配慮が必要な場面も多々ありました。準備を進める中で、あれはどうしよう、これがあつた方がいいかもしれない、ということが次々と出てきましたが、そんな時でも大会担当メンバーに相談をすればすぐにレスポンスがあり、問題解決に向けて皆さんがサクサク



ク進めてくださった事が本当に心強かったです。また、情報伝達が遅かったりと関係者の方にはやきもきさせてしまった場面もあったかと思いますが、いつも温かいお言葉をかけていただきました。新しいことにも前向きに取り組みたいという思いにさせていただいているのは、やはりこの学会の温かさ故だなと再認識しました。この場を借りて皆様にお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

さて、学術集会そのものもちろん重要ですが、懇親会も特別な時間です。自分のことを振り返ってみると、懇親会で近い席になった方とは半ば強制的にお話することになりますが、最初は少し緊張しているものの、最後には妙に仲間意識が芽生えることが多かったです。学会ではどうしても対象動物種が近い方とばかりディスカッションしがちですが、懇親会が新しい出会いを作ってくれることもあります。そして何より、懇親会に出るといつも、先生たちが一番はしゃいでいるなあ、他大学同士でも先生たちはみんな仲良しなんだなあ、自分もこの仲間になりたいなあと思うのでした。今では、動物の行動と管理学会の懇親会＝年1回大家族の一族が全員が集まる会、のような気持ちです。そんな懇親会をオンラインで再現できるのか、大会1週間前まで開催するかどうかや内容についてあれこれ悩みましたが、最終的には「場を設けることに意味があるのだ」と自分に言い聞かせ、皆さんにご案内をしました。参加者は30名程度でしたが、ベテランから懇親会デビューの学生さんまで様々な方にご参加いただき、「おうち借り物競争(お題にあうものを20秒内に家の中から探してカメラ前に提示し、どれが一番審査員の心に刺さるかを競う)」にもノリよくお付き合いいただけました。ブレイクアウトルームを使った少人数での談笑タイムでは、ベテランの先生方が若者の悩みを聞いたり、励ましたりする場面もあったようです。懇親会もオンラインというこれまでにはない形での開催でしたが、若い人たちに「妙な仲間意識」を芽生えさせることができたら運営冥利に尽きます。

学生の頃からお世話になっているこの学会で、大会運営という役割を与えていただき、本当にありがたい限りです。まだまだ若手のつもりでしたが、気付けばアラフォーに突入です。学生や大学院生、自分よりも若い世代にとって刺激的で包容力があり、伸び伸びと成長できる場として、今後も学会の運営に携われればとても幸せです。

## ISAE2021 参加報告

### 山梨 裕美 (国際担当・京都市動物園・京都大学WRC)

ISAE2021がオンラインで開催されました。インドのバンガロールでカレーを食べることはできませんでしたが、オンラインのため、自宅から気軽に参加できました。Wood Gush Memorial Lectureはインドらしく、トラの保全に関するお話(Dr. K. Ullas Karanth)でした。

また、Georgia MasonさんがUFAWスピーカーということで、基調講演を行いました。内容は、実験室のマウスやラットの環境がストレスに関連した健康状態にどのように影響するのかというメタ分析の結果でした。近年マウスやラットの飼育環境についても、環境エンリッチメントがされるようになりましたが、シンプルなケージでの飼育も行われています。Masonさんたちのグループでは、10,000以上もの文献を精査し、6,469件の文献をメタ分析し、循環器系の疾患など、ストレスに関連した病気の発症頻度がシンプルなケージでの飼育で増加するなどの結果が得られたとのことでした。非常に多くの文献をつぶさに分析された結果には圧倒されるとともに、アプローチについても勉強になりました。

わたしは、『Combining different animal welfare assessment methodologies to improve welfare of a Japanese black bear: human ratings and behavioural observations by humans and computer vision with deep learning techniques』というタイトルでポスター発表を行いました。ツキノワグマを対象として、ヒトによる評定・行動観察・機械学習の技術を用いた行動分類の3つの手法による動物福祉評価を比較した研究です。ヒトによる行動観察と機械学習による行動分類の一致度は大体84%で、2人の観察者の一致度85%とあまり変わらない結果であることなどがわかりました。オンラインだったことでかなり発表は選んでしまいましたが、最近の研究動向について理解が深まり参加してよかったと思いました。次回は北マケドニア共和国ということで...現地に行って参加できることを心より祈ります。

## 動物福祉イブニングセミナー開催

### 山梨 裕美 (世話人・京都市動物園・京都大学WRC)

2021年8月より、動物福祉イブニングセミナーを月に1回の頻度で開始しました。

近年様々な場面で動物福祉の取組が進んでいますが、「動物福祉」と言ってもその捉え方は人によって異なることもあります。動物福祉に関する研究や実践をしていくうえで、動物福祉の概念を理解し、適切な実践・研究に導けるような議論を構築していく作業が欠かせません。そこで今回、動物福祉に向き合う人たちの間で学びあうことができるように、肩肘はらない勉強会を企画しました。一般公開ではなく、関係者の招待制にすることで、マニアックな話なども取り扱えるようにしています。第1回目は動物園動物の福祉(話題提供者:山梨裕美)、第2回目は鶏の福祉(話題提供者:新村毅)をテーマに1時間~1時間半程度Zoomを使って行い、第3回目は動物福祉のe-learningについて(話題提供者:戸澤あきつ)で、11月1日に行いました。今年度いっぱい続ける予定です。メーリングリストでご案内しますので、お気軽にご参加ください。



## 編集後記

### 萩原 慎太郎 (福山市立動物園)

今回も、多くの方々に記事を執筆いただきありがとうございました。皆さまが日々お忙しくされている中、執筆依頼をするのは大変心苦しいのですが、依頼がありましたらご協力いただきますよう、よろしく願いいたします。